漢方シリーズ

博く学びて篤く志し、切に問いて近く思う。

博學而篤志、切問而近思。

▷12◁

広島大学病院総合内科・総合診療科
漢方診療センター特任教授
小川 恵子

外来で煎じ薬を使うには

宋代の「煮散法」から学ぶ

これまで、様々な処方や生薬の使い方についてお話ししてきました。それでは、実際に、生薬を有効に使い、より患者さんに合わせた処方をするにはどうしたらよいでしょう。

漢方薬のエキス製剤に比べ、「煎じ薬」（写真1）の方が処方の自由度が高く、治療効果が高いとされています。しかし、患者さんにとっては、生薬を煮出す手間が数十分かかり、煎じる際に発生する香りに対して家族から苦情が出るなど、実際に「煎じ薬」を継続して服用できる人は少ないのが現状です。

煎じ薬とIPCD法

そこで、私たちは、簡便で新しい煎薬調製法「IPCD（Immersing Powdered Crude Drugs）法」（文献1、2）を診療現場で導入しています。今年3月に完全自由診療による漢方外来を開設し、IPCD法による漢方処方で難治性疾患の治療に対応しています。

IPCD法とは、中国宋代の「煮散法」を参考にした、粉末生薬を熱湯に浸漬して成分抽出を行う方法で、笛木司氏（松花堂マツヤ薬局・東邦大学医学部東洋医学研究室）が考案した手法です。

「IPCD法の元になった「煮散法」とは、調剤した薬方を粉末にしてから煎じる方法で、宋代（10世紀）を中心に広く用いられていました。『太平惠民和剤局方』には、桂枝湯が「桂枝（去皮）芍藥（各二兩半）甘草（一兩）上為粗末。毎服二錢、以水一盞、入生薑三片、棗三枚擘破、同煎取七分、去滓、溫服不計時候」と記載されています。これによって、『傷寒論』に記載されている原法の生薬の半分以下で桂枝湯が作製できることが分かります。また、『和剤局方』の逍遥散は、「上為粗末。毎服二錢、水一大盞、燒生薑一塊切破、薄荷少許、同煎至七分」とあり、実は煮散法で服用されていたことが分かります。実際に、薄荷については、煮散法の方が、透涼作用を実感することができます。ですから、蘇葉や薄荷、桂皮などの揮発成分を抽出するのに非常に良い方法だと分かります。

通常の煎じ薬は30～60分煮沸する必要がありました。これに対し、私たちが採用しているIPCD法は、5分程度で調整でき、時間と手間を考慮しても簡便な煎じ方法といえます。

IPCD法の実際

処方された生薬を調剤時に業務用粉砕器で粉状にし、その粉末状の方剤に熱湯を加え、20秒ほど攪拌し、4分ほど放置、沈殿させた上澄みを茶こしで取り除いたものを服用します。また、IPCD法では、生薬を粉末化して抽出効率が改善し、通常の刻み生薬を煎じる方法と比較すると、約6分の1程度に節減できます（写真2）

しかし、いくつかの注意が必要です。「半夏」はそのままだと服用できないため、修治した制半夏を使用しています。また大棗、竜眼肉などの半乾燥生薬は粉砕器で粉砕できない場合もあり、十分に乾燥させるなどのひと手間が必要です。また、IPCD法が通常の煎じ薬の調整方法とは全く違うため、患者に対し抽出方法の説明や服薬指導が非常に重要となり、修治や調剤、服薬指導ができる薬剤師も必要です。

真生会富山病院（文献3）では、IPCD法を含めた、漢方診療を学ぶ仲間を募集しています。IPCD法を実際の臨床の現場で使うには、人材の育成が急務だからです。ご興味がある方はいつでもお問い合わせください。

写真1

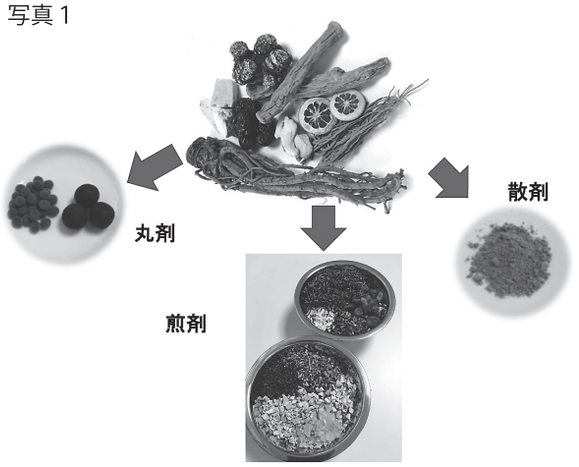

写真2

参考文献

1）Fueki, T., Makino, T., Matsuoka, T., Beppu, M., Sunaga, T., Tanaka, K., Nagamine, K. and Namiki, T. (2015), Quick and easy preparation method for decoction of Kampo formula inspired by the method of boiling powdered crude drugs in the Song period of China. Traditional & Kampo Medicine, 2: 67-73. https://doi.org/10.1002/tkm2.1023

2）笛木司, 牧野利明, 松岡尚則, 別府正志, 須永隆夫, 田中耕一郎, 並木隆雄, 宋代の煮散法にヒントを得た簡便かつ成分抽出効率良好な煎薬調製法の開発（第2報）, 日本東洋医学雑誌, 2016, 67 巻, 2 号, p. 114-122

3）https://www.shinseikai.jp/department/kanpou/detail.html